

小麦および大麦のクビアカクビホソハムシ（国内新発生）

令和5年6月上旬、北海道内の秋まき小麦及び大麦ほ場において、ほ場全体に止葉を中心としてかすり状の短い食痕が認められ、被害葉には体長が2～4mmの洋なし型、泥状の物質を背負った虫が確認された。これらの個体を採集し、室温で飼育したところ体長が4～6mmで前胸が褐色、鞘翅が光沢のある青黒色の成虫が羽化した。本個体および当該ほ場で7月中旬に再度採集した成虫について、横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、7月24日に国内未発生のクビアカクビホソハムシ *Oulema melanopus* (Linnaeus) であることが確認された。海外では本種は穀類および牧草の重要な害虫であり、とうもろこし、ライムギ、エンバクおよびチモシーなどでも発生が報告されている。令和6年においては、5月中下旬から越冬成虫がほ場に飛来し、長径1mm弱の長卵形の卵を葉身に数粒ずつ産卵、幼虫の加害は5月下旬から7月上旬まで継続することが確認された。近縁種で小麦の害虫となるムギクビボソハムシは成虫の前胸の色が鞘翅と同じ青黒色である点で本種と識別可能だが、幼虫の形態から両種を識別することは困難である。

（北見農試）



小麦上のクビアカクビホソハムシ（中央農試 佐々木 原図）